

ベストクラス選定理由書

作成者：西脇・野添・人見・宮崎・弓場・阿部・有馬・初田

科目名称	教育方法学		
	(担当教員名：伊藤博之)		
課程	学部・大学院 (修士・専門職)	開講時期	前期・後期
授業形態	講・演	授業規模	30人以下
インタビュー対象教員名 伊藤博之 (実施日時：8月5日(水)3限 ; 実施場所 ZOOMでのオンライン)			
インタビュー対象受講者名 藤井陽介 尾前賢哉 (実施日時：8月5日(水)3限 ; 実施場所：ZOOMでのオンライン)			
<p>選定理由</p> <p>授業評価アンケートでは「自分の考えを述べる機会が多い」、「主体的に学べる」というコメントが多く見られた。受講生同士で話し合い、学びを深められる点が高く評価されている。このように学生が積極的に授業に取り組めた要因には、以下のような特徴がある。</p> <p>①理論と実践の融合 授業は第2回～4回で、先人たちの実践を学び(理論)、第5回～13回で模擬授業と授業検討(実践)を行うという構成になっている。理論だけでなく、先人の実践を自分たちで追体験することで、学生は「授業する技」を身につけることができ、理論と実践の融合を図っている。</p> <p>②模擬授業と事後検討会 模擬授業は過去の実践をもとにしたものであり、内容が面白く学生が興味を持って取り組めるようになっている。模擬授業は45分間行うため、ごまかしがきかず、しっかりと事前準備を行う必要があった。このことが、主体的な学びにもつながっている。また、事後検討会では、良かった点、改善点を受講生同士で話し合う。どのように改善できるかを、学生自身が意見を持ち寄って考えることで、自分たちが授業を作っているという意識が芽生える。検討会には大学院の現職教員にも入ってもらおう。現職教員のアドバイスは、反省点ばかりに目を向けがちな学生に、いい点にも気づかせることになると同時に、より実践的な学びへとつながっている。</p> <p>③模擬授業に向けた教師のフォロー 学生が模擬授業を行うにあたり、疑問点や悩みを相談できるように、授業外の時間でも、学生からの質問を受け付けている。参考図書を紹介したり、授業について討議したり、準備段階から学生の学びを支援する体制を整えている。「放り出すのではなく、準備の段階から相談に乗ってくれた」、「相談しに行きやすい雰囲気」と受講生も感じており、主体的な学びを保証している。</p> <p>④失敗できる雰囲気づくり 教師になってからは、失敗がしにくい。大学の授業では、失敗を許容し、チャレンジすることが可能である。学生が「失敗してもいい」と安心して学習に取り組めるように、集団作りにも配慮している。受講生は同じコースの学生であるが、深く関わりがもてている関係ではない。授業を進める中で、教員が学生をつなげ、何でも話せる人間関係づくりを行っている。これにより、学生は安心して、自分の言葉で討議できたり、失敗を恐れずに、一步踏み込んだチャレンジもできたりした。</p> <p>⑤受講生同士の対話 なんでも話せる雰囲気があるからこそ、受講生同士で議論しながら授業が進んでいるという感覚が得られた。教員は教室の後方から見守り、必要以上の干渉はしない。教員がおぜん立てするのではなく、自分たちで学びを深められるように意識されている。受講生同士の対話は授業外でも行われたそうで、まさに主体的・対話的で深い学びにつながっている。</p> <p>●以上の理由により、本授業はベストクラス候補にふさわしいと考えられる。</p>			